Two Pieceの純情

華実衣　唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｗｏ　Ｐｉｅｃｅの純情

【Ｎコード】
Ｎ１３３８Ｔ

【作者名】
華実衣　唯

【あらすじ】
中学からの同級生で恋人同士の１６歳の慶介と麻衣子は、麻衣子の父親のアメリカ転勤で離れ離れになる事に。　その前に、麻衣子の提案で思い出になる、ある物を２人だけが知る秘密の場所に隠して、８年後に再びその場所で会う事を約束する。　その間、予期せぬ出来事が・・・そして　２人はお互い思い悩みながら成長し８年後の約束の日を迎える・・・

【 第一章　約束 】

慶介はこの思い出の場所に一人立っていた。

ある女性（人）との約束を守るために、果たすために

～8年前～

「本当に行っちゃうの？」お昼休みの学食で慶介が、麻衣子に詰め寄ると「ごめんね、ケイちゃん。　お父さんの仕事の関係でどうしても行かなくちゃならないの」と肩を落として答えた。
前川　慶介と相澤　麻衣子は共に１６歳。　高校1年の同級生である。中学3年の時に、同じ図書委員になったのがキッカケで麻衣子の方からアプローチしをして付き合うことになった。
そして、高校も同じ所になり今もまだ彼氏、彼女の間柄である

「そっか～、で、いつ行くの？」更に慶介が聞くと、「再来月の初めには行く予定。　急に決まったから・・」といいにくそうに答えた。
麻衣子の父親は、大手の外資系の保険会社に勤務していて今回、アメリカのボストンに転勤が決まったのだ。　所謂、栄転である。

日本支社での抜群の成績が買われ、本部からお呼びがかかったのだ。
だが、麻衣子にとってはこの上なく辛いものだった。そう、恋人である慶介と離れ離れになるからだ　父親の勤務する会社のルールで、転勤する時は家族全員でという事と、自分達家族の為を思っての決断だと頭では分かっていても・・
「離れ離れになるのは寂しいけど、お父さんの仕事のことだから仕方ないよ。　アメリカはちょっと遠いけどまた、会える時があると思うし、電話でも手紙でも連絡し合えるさ。　それに、マイの得意な英語も向こうでもっと磨きがかかっていいんじゃない」と、慶介は気丈に答えてみせた。
「うん、そうだね。　あたし、ケイちゃんのことず～っと好きでいるから。　だから、ケイちゃんもあたしのこと忘れないでね」と言うと麻衣子は少し笑顔になった。
「忘れる訳ないじゃん、マイのことを」慶介も笑い返した。
「うれしい。　ありがとう。　ねえ、ケイちゃん、あたしがアメリカに行く前に2人だけの思い出を作らない？　あたしに、いい考えがあるの」麻衣子が提案すると、慶介も「うん、いいね。　で、どんなこと」と聞くと麻衣子は、「今は内緒。　来週の日曜日、1時に桜ヶ丘公園に来て。　そこで教えるから
と答え、「わかった、じゃあ日曜にね」と慶介は約束した。

～秘密の場所～

次の日曜日、麻衣子は桜ヶ丘公園に約束の１０分前に来ていた。この桜ヶ丘公園は、麻衣子の自宅から歩いて5分とかからない所にあり学校帰りに2人でよく来ている場所である。
麻衣子はもともと性格が明るく行動的で、慶介と付き合う時も積極的にアプローチしていた。
そのまさに反対とも言えるような慶介は、どんなことにも先に頭で考えすぎて行動を起こすまでに時間がかかる。　傍から見ると優柔

不断に映ることも・・・
ただ、誰に対してもすごく優しくて、一度行動を起こすと人の為に尽くす姿勢が麻衣子が惹かれた理由のようだ。
あと、他愛もない悪戯をする子供っぽいところも好きだった。
なので、2人が一緒にいると麻衣子の方がいつもお姉さんらしく見えた。
その慶介が、約束の1時ギリギリに麻衣子の待つ桜ヶ丘公園に着いた。
「もう来てたの。　早いね」と、途中は走って来たのか”ハアー、ハアー”と白い息を吐きながら麻衣子に言った。
「ちょうど今1時。　ごう～か～く」
腕時計を見ながら、ちょっと茶化し気味に麻衣子は慶介に向かって言った。
いつも、大体遅れて来るのは慶介の方だ。　「今日はちゃんと、間に合っただろう」
ちょっと、ムッとしながら答えそして、「で、この前いってた思い出を作る案って何？」と、少し語尾を強めて続けて聞いた。
「あっ、ごめん。　怒った？　あのね、あれからまたちょっと考えて・・・」といいながら少し大きめのボストンバッグから、カメラの三脚と一眼レフのカメラを取り出した。
「それ、どうしたの？」慶介が聞くと、「これ、お父さんのカメラなんだけど、お父さん今日、接待ゴルフとかで居ないからちょっと、借りてきちゃった。　ケイちゃんと一緒に写真撮ろうと思って・・」と
”ちょこん”と舌を出して答えた。　「後で叱られない？　お父さんの大事なものなんでしょう？」慶介が言うと、「大丈夫！帰ってくる前にバレない様にするから」とあっけらかんと、麻衣子は答えた。
「なんか、改めて一緒に写真撮るってぇ～のも照れくさいけど・・・で、どこで撮るの？　ここで撮るの？」と慶介が聞くと、麻衣子は、

「ねえ、あたし達の秘密の場所で撮らない？　でね、そこで一緒に撮ってその写真をジグソーパズルにするの。　それを額に入れて、あたし達の秘密の場所に隠しておくの。
１枚ずつお互いにピースを外して、その外したピースは持ったままで」　「でね、何年かしたらまた同じ場所で会って、お互いの外しておいたピースをはめてパズルを完成させるの」と嬉しそうに話した。
　秘密の場所とは、隣町のある小高い丘の上に１本だけ立っている古い大木の下のことで、その上からは広い海が一望できるところである。
慶介の祖父母がこの隣町に住んでいて、子供の頃よく慶介は遊びに来ていた。　そして、おばあちゃんに連れて行ってもらったところだった。　慶介達が付き合って初めてのキスもその場所だったのでまさし　２人にとっては誰にも知られていない秘密の場所なのである。
慶介は「それ、すごいね！　なんかドラマみたい。　いい案だけど・・・もしかして、あそこまでカメラとこの三脚、オレが運ぶの？」と聞くと、『正解！！』　「と、いうことでケイちゃんよろしく！」
慶介は、（やれやれ、、、）という表情で「わかりました。　麻衣子様」といながら渋々ボストンバッグにカメラと三脚をしまい、隣町」まで行くために駅に向かって歩き出した。　一度言い出したら聞かない麻衣子の性格を慶介はよく知っているので、特に反論もしないで・・
そのあとを、身軽になった麻衣子もついて行った。　隣町までは、電車で片道１０分弱。

～指きり～

３０分後、２人は隣町の駅に降り立ち目的地の丘を目指して歩き

始めた。
途中、２人がお気に入りの缶のホットミルクティーを買い、飲みながら。　そうして駅から歩く事、４０数分小高い丘の大木の下に着いた。
まだ、１月の下旬で寒さが身に凍みる季節なのだが、２人とも額に汗が滲んでいた。
「やっと、着いたあ～。　あ～あ疲れた」慶介が寒さで硬くなった土の上に寝そべった。
季節的には木には葉は茂っていないが、青っぽい匂いが微かにした。
「お疲れ様。　ありがとう。　ケイちゃん」そう言って麻衣子も並んで横になった。
　しばらくして、麻衣子が「日が暮れる前に撮ろうよ。　この木と海をバックにして」といってバッグから三脚とカメラを取り出した。
　運のいいことに今日は快晴で、冬にしては眩しいくらいの青い空が、丘から見える景色を一層引き立たせていた。
木の後ろに見える海は、幾分低い太陽の光を浴びてキラキラと水面を輝かせていた。
「ねえ、ケイちゃん見て。　海すっごくキレイ！」麻衣子は、三脚を立てている慶介に向かっていつも以上に甲高い声で言った。　「ほんとだね！」慶介もこのときばかりは、素直に景色に感動した。
三脚の準備も終わり、麻衣子がカメラをセットした。
「ケイちゃん、どういう風に撮ろうか？」と麻衣子が聞くと、「普通でいいんじゃない」慶介が素っ気なく返した。
「それじゃつまんないから、あの時みたくキスして撮る？」と麻衣子がいった瞬間、顔を真っ赤にしながら慶介は、「何、バカいってんの。　これ現像してパズルにしてもらうんだろう。　そんなの恥ずかしいよ」とすぐさま、反論した。　すると麻衣子は、「冗談、冗談だよ。　ケイちゃん顔赤くなってるよ」といい、それを聞いてまた一層慶介の顔が赤くなっていった。
「ケイちゃんのそういうとこ、大好きだよ！！」麻衣子はそういい

ながら、慶介の頬に軽くキスをした。
「あんまりからかうなよ」慶介は、恥ずかしいやら嬉しいやらで・・・
・
でもとても幸せな気分だった。

「わかった。　じゃあ、またここで会う約束の意味を込めて、指きりしながら撮ろうよ」
再び、麻衣子が提案すると、慶介は「それも恥ずかしいけど・・・まあ、キスよりましかな」と答えた。顔はまだ赤いままで・・
「じゃあ、決まりね！」
そう言うと麻衣は三脚に立てたカメラのファインダーを覗きながらちょうど2人が並んで更に、木と海が写る位置を捜しはじめた。
麻衣子は多少ではあるが、カメラの知識があった。
「ケイちゃん、ちょっとカメラの前に立ってみて」麻衣子が慶介に指示を出すと、慶介は言われた通りカメラの前に立った。　「もう少し奥に立って。　もうちょい右」と暫く指示を出し、そして「うん、いい感じ。　この位置で写すね」と言って慶介の横に立った。
「じゃあ、指きりね」
と麻衣子が左手の小指を差し出すと、慶介も右手の小指を差し出、そして絡めた。
「指きりの歌は歌わないよ」慶介は照れくささでわざとぶっきらぼうに言った。　「そう言うと思った」と麻衣子は答え、続けて「歌わなくていいからまた、ここで会う約束だけはして」とお願いすると慶介は「わかった。　またここで絶対会おう！」そういって絡ませた指を上下に振った。
麻衣子も嬉しそうに笑って頷いた。

『カシャ、カシャ、カシャ』　『カシャ、カシャ、カシャ、カシャ』乾いたシャッター音だけが他に誰も居ないこの丘の上に響く。

セルフタイマーで数枚、写真を撮った。　お互いまた、この場所での再会を誓って・・・

～ピース～

数日後、学校の昼休み麻衣子は慶介を廊下に呼んで、「ケイちゃん、パズル出来たよ」とパズルの入った箱を見せた。　「意外と早く出来たんだね」慶介がいうと「うん、時間がないからお店の人にちょっとムリ言ってお願いしたからね」と箱を開けながら答えた。麻衣子は、父がよく利用するフィイルムのプリント店の店主にお願いして、写真をパズルにしてくれる業者に外注してもらったのだ。

しかも、麻衣子の父とも親しい間柄なので格安にしてもらいさらに、「お父さんには内緒のに」というお願いも聞いてもらった。実は、麻衣子の父親は麻衣子が慶介とつき合ってることを知らないのだ。

そのパズルのピースを見ながら慶介は「これ、よく出来てるね。せっかくだから一緒に作ろう」と珍しく自分から麻衣子に提案した。

麻衣子もそのつもりでいたのだが、慶介から言われて一層嬉くなった。

「うん、そうだね。　じゃあ、明後日の日曜日にうちで作らない？　お父さんもまたゴルフで家にお母さんしかいないから」というと、慶介は「いいよ。　じゃあ、日曜に」といい教室に戻った。

それから、2週間後の土曜日お昼での授業終わりで真っ直ぐ例の”秘密”の場所に二人で来ていた。

一緒に作ったパズルとお互いの小指の部分のピースを持って。

「この木の奥に隠しておこうね」そういいながら麻衣子は、大きな木の隙間を指さして言った。

「そうだね」と言って持っていたハガキ大の木のフレームに入った完成したパズルを大木の隙間の方に慶介は入れた。　慶介がパズルを木の隙間の奥深くに入れて立ち上がると、ふと麻衣子が「また会えるよね？　本当に会えるよね？」と珍しく不安そうな顔で、慶介をじっと見つめた。

「絶対会えるよ！　そのためにここにパズルをしまっておくんだから。　マイのことずっと想ってるし」と慶介がいい終わると「ははあ～」と笑いながら麻衣子は「ケイちゃん、ひっかっかった。あたしケイちゃんのこと信じてるし、どんなことがあってもケイちゃんのこと好きでいるから心配してない」「いつもケイちゃんに悪戯で驚かされてたから、今日はその仕返し！　でも、嬉しい。　そういってくれて」と満面の笑みで。　「え～、それはないよ。　真剣に言って損した」と慶介は顔を歪めた。　「ごめん、ごめん。でも、出来たら違う言葉も言って欲しかったなあ～」とワザと口を尖らせて言った。

その姿を見て慶介はおもわず、「ぷっっ」と吹き出し、麻衣子もつられて一緒に笑った。

「違う言葉は次回、会う時までの楽しみにしてよ～っと」麻衣子は、まるで独り言のように言った。

慶介は、「・・・・・う～ん」と言ったままだった。　実は、麻衣子は慶介と離れることが本当は辛く

寂しくてたまらなく不安だったのだが、慶介には悟られないように精一杯強がっていたのだ。　麻衣子より少しお子様の慶介にはこの時、解らなかったが・・・

「ねえ、ケイちゃんここでまた会うの8年後にしない？」麻衣子がいうと、「えっ、そんな先に？　もっと早く会えるよ！」慶介が答えると、「うん、あたしもそう願ってるよ。　もっと早く会いたいし、会えるように。　でも、この場所は2人にとっては特別なとこだから、お互いもっと成長してから”ここ”で会いたいの」と麻衣子は答えた。　「う～ん・・そういうことならそうしようか。　で

も、なんで8年？なの？」慶介がまだ、煮えきらずに尋ねると、「ケイちゃん、最初にデートしたときの事覚えてる？」今度は麻衣子が尋ねた。　「うん、覚えてるよ。　映画、見に行ったよね」とすぐに返答した。
麻衣子は、続けて「じゃあ、その日にちも覚えてる？」と再び聞いた。　「う～ん・・・確か8月の・・・7日だっけ？」今度は答えずらそうに言った。
「惜しい！　8月8日だよ。　も～う、やっぱり忘れてる」とワザと怒っているかのように麻衣子は、慶介に向かって言った。
「そうだったかなあ～」となんともバツの悪そうに慶介は呟いた。
「ケイちゃんは忘れててもあたしには特別な日だったの。　そらから、あたしにとってのラッキーナンバーは『8』って決めたの。
だから・・」それを聞いて慶介は、「わかった、マイが考えたんならいいよ。　8年後に会おう」
「うん。　じゃあ決めるよ。　8年後の今日ね。　ケイちゃんも忘れないでね」麻衣子は念を押すように言った。　「そういえば、マイとお母さん出発するの明後日だったよね？慶介が麻衣子に尋ねると、「そう。　お父さんは一足早く先週、向こうに行ってるから」麻衣子が答えると、続けて慶介が、「じゃ、空港に見送りに行くよ。
明後日は卒業式で一年生は学校休みだし、マイのお父さんもいないから大丈夫でしょう？　それに明日、日曜だけど、マイ準備とかで忙しくて会えないんでしょ？・・」と、それを聞いて麻衣子は「うん、ごめんね。　でも、当日は大丈夫。　ケイちゃん来てくれるの嬉しいな。　まだ、何時までに空港に向かうか分からないから、明後日の朝、電話するね」と答えた。
「わかった。　じゃあ、明後日電話待ってるから。　頑張って早起きする」というと、「うん、必ず連絡するから」と麻衣子は”ニコッ”と笑って答えた。
その日の夕方、二人は初めてお互いの体を重ね合わせた。

二日後の朝、「慶介〜、麻衣子ちゃんから手紙が来てるよ」母親の貴代の声で慶介は飛び起きた。
ボサボサの寝癖の頭とパジャマ代わりのスウェットのまま部屋を飛び出し、居間にいる母、貴代から手紙をもらうと慶介は便箋の封を手で急いで切り、中を見た。　その手紙には、高校生とは思えないような大人っぽい字で

《「Ｄｅａｒ　ケイちゃん」
ごめんなさい。　あたし、ケイちゃんに嘘をつきました。　今、ケイちゃんがこの手紙を見ている頃
あたしは、アメリカに着いていると思います。　実は、出発日は昨日の夕方で途中、ケイちゃんちの前まできてこっそりポストにこの手紙を入れておきました。　きっとこの手紙を見たらケイちゃん、怒ると思うけど、あたしの気持ちわかってね。　空港でケイちゃんに見送られたらあたしきっと離れるのが辛くて
アメリカに行けなくなると思ったの。　自分勝手なのは分かってるんだけど・・・だからわかってね。　こっちは最初、お父さんの会社の社宅みたいなとこに住んだあと、二週間後に一戸建ての家に住む予定なので決まったら必ず、連絡するね。　アメリカの生活に不安もあるけど、またケイちゃんと会える日を楽しみにあたし、頑張るからケイちゃんも頑張ってね。　ず〜っと、ケイちゃんのこと好きでいるから！　約束の日も忘れないから。　その時はまた、一緒に笑って話ししようね。　お別れっぽい言葉はイヤだから、いつものように、じゃあ、またねケイちゃん」

麻衣子より　≫

慶介は、手紙を読み終えるとその場に座り込んでしまった。　麻衣子の気持ちを理解しようとするのだが、急な事で頭の整理がつかない。　（どうして・・・）慶介の頭には暫く、この言葉しか出てこなかった。

町はようやく、木々に色が芽生え始めようとしている季節を迎えていた。

第二章　空白　【

～衝撃～

麻衣子がアメリカに行ってから、二ヶ月が過ぎようとしていた。慶介は、毎日のように麻衣子からの連絡を待っていた。　来る日も来る日も、電話の音に「今日こそは」と期待しながら待ち続けているのだが、一向に麻衣子からの連絡はなかった。
慶介は、麻衣子と仲が良かったであろう女友達にも聞いてみたが、皆同じように「連絡が来てない」という返事だった。
～良かったであろうというのは、慶介と麻衣子は違うクラスであまり麻衣子から友達の話しを聞いたことがなかったので、なんとなくの推測で仲が良さそうな子に聞いてみたのだ。　そこで、初めて気付いたことだが、麻衣子はあまりクラスメートとうまくやれていない感じであった。　というのも皆、それほど関心を示している素振

りが感じられなかったからである。　唯一、幼馴染みで同じクラスの香山沙織(かやま)だけは慶介同様　麻衣子のことを気にかけていた。
慶介は、麻衣子から連絡がない事と、クラスでの麻衣子の状況を知り二重のショックで、勉強はもともとだが、大好きなはずのバスケットの部活にも全く身が入らない。　あまりの落ち込みように、仲のいい男友達も慶介に声をかけにくくなっていた。
自分から、麻衣子に連絡する手立てもなく、やりきれない思いだけが慶介を覆っていた。

そんな、日々が二ヶ月半を過ぎようとしているある日曜日の朝、前川家に一本の電話が鳴った。

この頃の慶介は、夜なかなか寝つけず昼、夜が逆転している生活を送っていたのでこの電話の音も耳には届かずにいた。
熟睡している慶介の耳に、微かに母親の声がした。　「慶介、電話だよ」
何度目かの母親の呼びかけに、「はっ」と目を覚まし、電話のある居間へと急いだ。
居間に着くと、母の貴代が普段とは違う神妙そうな顔で、「マイちゃんのお母さんからだよ」と言って受話器を手渡した。　慶介の頭の中は一瞬、「？」となりながら
「もしもし、慶介ですけど」と電話に出ると、麻衣子の母の利恵が「しばらくぶりね、慶介君。　元気ですか？」慶介は、麻衣子の母親と何度も会っており多少、気心も知れていた。　「はい、あの～マイ・・いや麻衣子さんは？」真っ先に慶介が聞きたいことである。
　すると、利恵は「その麻衣子のことなんだけど・・」「マイに何かあったんですか？」慶介が間髪入れずに聞き返すと、利恵は一呼吸おいて「・・実はね、さっきあなたのお母さんにもお話したんだけれども家の引越しが終わってすぐに、麻衣子、近所にある本屋さんに買い物に行って・・・」

［慶介］「で、どうしたんですか？」
［利恵］「そこでね・・

階段から落ちて・・・」

［慶介］「えっ！」
微かに、利恵の声が詰まった。　続けて、「でも、幸いケガはたいしたことはなくて、右足の捻挫と肘の軽い打撲ですんだのだけれども・・・」一瞬の沈黙に慶介は
「ケガはもう治ったんですよね？　もう大丈夫ですよね？」とまるで、自分に言い聞かせるように利恵に迫った。　利恵は
「ええ、ケガが１０日程度で治ったのだけど・・・・・」
［慶介］「それで、どうしたんですか？」
その先がいいにくそうな麻衣子の母に更に、急かすように慶介は聞いた。
すると、利恵は重くなっていた口を開き始めた。
「慶介君、落ち着いて聞いてね。　麻衣子、階段から落ちた時に同時に頭を強く打ったらしくて・・病院でいろいろ検査をして調べてもらったんど、未だに・・・

記憶が戻らないの・・」最後は涙まじりの声で
「えっ・・・・・」
慶介は一瞬のうちに頭の中が真っ白になり、何も言葉が出てこなかった。
続けて利恵は、「もう退院してから１ヶ月近く経つのだけれど、私達のこともあなたとのことも全て忘れてしまっているの。　お医者さんが言うには、脳波には異常は見られないから一時的な記憶障害で、時間の経過と共に思い出すケースもありますってはは言われているのだけど、麻衣子自身が一番どうしていいのか分からず、殆ど部屋に閉じこもりっきりなの。」
「どうして、そんなことになったんですか？」慶介は声を絞り出す

ように質問した。
利恵は「これは、あなたには言いずらい事なんだけど・・正直にお話しするわね。
その日、麻衣子はあなたに送る手紙と便箋を買いに本屋さんに行ったの。　３階に便箋の売り場があって
そこで便箋セットを買って、多分急いでたと思うんだけど階段を降りている途中、下の階からかけ上がって来た子供達を避けようとして足を踏み外してしまったらしいの。　救急隊の方がその場にいた他の人からそう聞いみたいで。　もっと早く、あなたに伝えるべきだったのだけれど、私達もなかなか気持ちの整理がつかなくて・・・
　こういう形になってしまって。　今日は、その事を伝えるのと慶介君にお願いがが実はあって電話したの」すると慶介は「僕に出来ることがあったら何でも言って下さい」
「ありがとう。　私達もあの子が退院してからいろいろやってみたんだけど、一向に何も思い出せないので慶介君にあの子に手紙を書いて欲しいの。もしかしたら、大好きなあなたからの手紙で何か思い出せるかもと思って・・」すぐに慶介は
「いいですよ。　マイの為なら毎日でも書きます」一呼吸おいて利恵は「ありがとう。　でもあなたも勉強や部活で忙しいし、迷惑はかけたくないから、時間のある時に一ヶ月に一通送ってくれる？半年位の間。　その事はあなたのお母さんにもさっき承諾して頂いたから。」「わかりました。　マイが何か思い出せるようなの書いて送ります」慶介は少し”キリ”っとした口調で答えた。
「本当にありがとうね。」また涙声になりながら利恵が頭を下げて言った。
続けて、「この事は、慶介君と、沙織ちゃんにしか言ってないの。
　恥ずかしい話だけど麻衣子が高校に入ってからの事があまり分からなくて・・あの子もあまり話したがらなかったから。　だからこの事はまだ、他のお友達には内緒にしておいてね。　あまり沢山連絡が来ても益々あの子が混乱するだけなので。　お願いね」

［慶介］「わかりました」
［利恵］「まだあの子、電話には出られる状態ではないので、住所だけ教えるわね」
その後、利恵から向うの住所を聞いた後、慶介は電話を切り自分の部屋に戻りすぐにレポート用紙に向かって麻衣子宛に手紙を書き始めた。

～繋がり～

麻衣子の母から電話がかかってきた日以来慶介は、毎月一通手紙を書き送り続けていた。
麻衣子と知り合った時のことから、初めてのデートのこと、そしてあの丘でのことも。
思いつく限りのことをレポート用紙に書き綴った。　一心不乱に。
４通目からは、今の学校でのことも書くようになった。　何か、麻衣子の記憶を戻らすキッカケになればと必死な思いで。
麻衣子の母、利恵からお願いされた６ヶ月を過ぎても、慶介の筆は止まることなく手紙を送り続けていた。
その間、麻衣子からの連絡はないままだったが、慶介にとってはそれが唯一、麻衣子と『繋がっている』という実感でもあった。　同時に、いつか必ず記憶が戻ると信じて・・・
　そうして、８通目の手紙を書き終えたちょうど次の日、ポストに一通のオレンジ色の便箋が届いていた。
今では毎朝、一番にポストを見に行っている慶介がその手紙を最初に目にした。　便箋の色を見て、すぐに麻衣子からだとわかった。
　オレンジ色は麻衣子の一番気に入ってた色なのだ。
新聞の朝刊と一緒にその便箋を手に急いで部屋に戻り、封を開けた。
　中は、いつもの大人っぽい麻衣子の文字が並んでいた。

《　前川　慶介様へ　》

「いつも手紙を送ってくれてありがとうございます。　写真も何枚も送ってくれてありがとうございます。　あなたとの楽しかった事や、あなたが私の事を想ってくれている事はすごく伝わりました。

だけど・・・　ごめんなさい。

まだ、前の記憶が全然戻らないんです。　必死に思い出そうとしても何もわからないんです。　両親の事も、なぜ今、ここにこうしているいるのかも・・・　今は、少しずつ気持ちが落ち着いてきたんですが、まだ学校には行っていません。　あなたから手紙は　うれしいのですが、同時に何も思い出せない自分がすごくつらくなります。

悲しくなります。　こういうと、あなたには大変悪いのですが、もう手紙は送らないで下さい。　あなただけではなく、他の誰ともまだ会ったり話したりするのが怖いんです。　わがまま言ってごめんなさい。　本当にごめんなさい・・・」

手紙を読み終えた慶介は全身の力が一気に抜け、麻衣子の母親から電話をもらった時以上のショックで心の中で、《どうしてだぁー》と何度も何度も叫んだ。

～信頼～

麻衣子からの手紙を読んで以来、慶介はひどく落ち込み麻衣子に手紙を書く事もしなくなり、再び何もする気が起きなくなっていた。そうして、冬休みが明けて少し経った頃、麻衣子の幼馴染みの沙織に慶介は学校の廊下で呼び止められた

「慶介君。　何か元気ないみたいだけどもしかして、麻衣子から手紙来てたの」と沙織に尋ねられて、「うん・・どうして知ってるの

？」慶介が反対に聞くと沙織は、「実は私宛にも手紙が来てたの。
まだ何も思い出せないって。　そして、そんな自分が辛いからもう手紙は送らないでねって。　慶介君、元気ないみたいだったから、同じ内容の手紙が届いたのかなぁ～って」
「・・・・・う～ん」答えるでもない慶介に、「図星だなぁ～。ねぇ、慶介君、麻衣子の事好きなんでしょう？　信じてるんだよね？」続けて、「だったら、そんな落ち込んでたら麻衣子が記憶が戻った時に悲しむよ。　好きな気持ちがあるんなら信じてあげないと。
多分、もう手紙も書いてないんでしょ？」
すると慶介は、「書ける訳ないよ。　もう送らないでくれって言ってるのに」ちょっとムッとしながら答えた。　沙織は一呼吸おいて「そっか。そうだよね。　でも私はね、麻衣子がきっと記憶がいつか戻るって信じてるし、少し気持ちが落ち着いたら手紙を見てもらえるかもって思って今も書いて、お母さん宛に送ってるよ。　麻衣子には気づかれないように普通の封筒に入れてね。　私はそうしたいからしてるんだけどね。　まぁ、あとは慶介君の考えるとこだしね」そういって隣の教室に戻った。
沙織のその言葉を聞いて慶介は、何かで胸を掴まれたような衝撃が走り「オレは一体何をしてるんだろう。　麻衣子のことを本当に好きなのに。　本当に苦しいのはマイなのに・・・」と自分に言聞かせるように心の中で呟いた。
と、同時に麻衣子に対して「自分に出来ることを精一杯しよう」と気持ちを新たにした。
その日から、また麻衣子への手紙を書き始めた。　ただ、封には沙織と同じように麻衣子のお母さん宛にして裏には自分の名前を書かずに。

こうしてまた慶介は、毎月とはいかないが定期的に麻衣子に手紙を送り、次の年何とか頑張り地元の私立の大学に進学することが出来た。　その間、麻衣子からは連絡はなかったが麻衣子の母からは、

感謝の言葉と、麻衣子の近況が書かれた手紙が数通来ていた。　その手紙では、麻衣子はまだ引きこもっていて状況はかわらないというものだった。
慶介は、それでもあきらめずに手紙を送り続けた。　一縷の望みをかけて

～葛藤～

慶介が大学2年に進級した頃から、麻衣子の母からの連絡がパッタリ途絶えた。
時を同じくして、慶介が書いた手紙も自宅に戻るようになっていた。
いつも便箋の裏には、麻衣子に気付かれないように住所の横に自分の母親の名前を書いてあったので、正確には母親宛に戻って来ていた。
唯一の麻衣子との繋がりの手段をなくしてしまった慶介はそれ以来、手紙を書くことを止めてしまい、割と真面目に通っていた大学もサボりがちになっていった。
明け方まで、お酒を飲み歩き自宅に帰らないこともしばしばあった。
お酒は大学に入ってからおぼえたのだが、「飲みに行こ」と自ら頻繁に友達を誘い、周りから「もう帰るぞ」という説得も聞かず、浴びるようにお酒を煽っては倒れ込むことがよくあった。　麻衣子とのことで自分ではどうすることも出来ず、更に接点さえなくした慶介は半ば、そのことを強引に忘れようとするかのように自暴自棄になっていた。
その行動とは裏腹に「もう麻衣子とのことは忘れよう」「あの日の約束のことも」
そう思えば思うほど慶介の心の中は、それまで以上に麻衣子のことでいっぱいになっていった。

そんな葛藤の中、慶介は満たされない日々を、ただ淡々と過ごしていた。

【 最終章 運命 】

～事実～

麻衣子と音信不通になって気持ちが荒れていた慶介だったが、母親の説得もあり十数社受けて、小さいながらも地元の広告代理店に就職が決まった。 大学の方もギリギリではあったが、何とか単位を取り卒業にこぎつけた。

慶介が入社した会社は、社員が１２名の小規模の広告代理店で主に、サービス業全般のチラシ作成や独自に出版している情報誌に企業の広告を掲載したりしている会社である。

入社１年目の慶介の仕事は、まず先輩社員と一緒に自己紹介を兼ねての挨拶周りや、コピー取りやその他の雑用が主な仕事であった。

元々慶介は、「この仕事に就きたい」というものが特になく、「どこでもいいから決まれば」程度でこの会社に決めた経緯があるのでやる気もあまり感じられなかった。

度々、上司からかも先輩社員からも「集中力がない」とよく怒られていた。

ただ、まだ麻衣子の件をずっと引きずったままの慶介には、その言葉もあまり届いてはいなかったのだが

そんな調子で一年が過ぎたある日、お得意様回りをしている途中

で立ち寄ったコンビニでばったり沙織に会った。

「あれ、慶介君じゃない？　あぁーやっぱりそうだ」と雑誌を見ていた慶介に、お昼ごはんを買いに来た沙織が話しかけた。
「元気ぃー、しばらくぶりだね」沙織が尋ねると、「う～ん、何とかね」素っ気無く慶介は答えた。
続けて沙織は、「ねぇ、これからお昼なんだけどまだだったら一緒に公園で食べない？」と誘ってきた。　ちょっと間をおいて慶介は「う～ん、・・いいよ」といい、すでに買っていたお弁当を持って一緒にお店を後にした。　そのコンビニから５０ｍと離れていない公園のベンチに２人並んで座った。
沙織は高校を卒業したあと、短大を出て今は設計事務所の事務をしている。　慶介と会うのは高校生以来なので４年振りであった。
二人でお弁当を食べながら「そういえば、麻衣子からかお母さんから連絡きた？」と沙織が慶介に聞いた
慶介は、買ってきたお茶を一口飲んでから「ううん、全然とってない。　て、いうかマイのお母さんからも返信ないし、手紙も戻ってくるようになったから、もういいんだ。　それからずっと書いてないし・・」とちょっと投げやりな感じで答えた。　すると沙織は「やっぱり知らなんだ・・・私のも戻ってきててずっと気になってたんだけど実は、マイのお母さん体調を崩してたみたいでしばらく入院してたんだって。　で、その少し前にマイのお父さんはボストンの会社から出向になってシカゴに家族で半年間移ったんだって。
だから、お母さんから手紙が来なかったんじゃないかな？　私の会社のクライアントさんでマイのお父さんと同じ会社の人がいて、最近家をリフォームしたの。　私も会社で何度かそのクライアントさんと話しているうちにその人の仕事の話しになって、それで偶然わかったんだけど・・それでお母さんは今はもう体調も良くなったみたいだよ。　でも麻衣子のことはわからないようだったけど」沙織が話し終わると

慶介は「えっ」という表情に一瞬変わったが、「そうなんだ。　でももう多分マイの記憶も戻ってるかどうかわからなし、もし戻ってたとしてももう俺のことなんとも思ってないよ。　きっと」と口調は重いままだった。

「また慶介君の悪いいじけ病が始まったぁ～。　余計なお節介かもしれないけど、確か来年かな？二人しか知らない所で会う約束したんじゃないの？　詳しくは聞いてないけど、その時の麻衣子〈お互いどうなってるか楽しみ〉って言ってたよ。　多分、麻衣子はそのことだけは絶対思い出すと思うよ。　慶介君はほんとの気持ちはどうなの？　もう会いたくないの？」

［慶介］「・・・・・」

「慶介君、変わんないなぁ～。　〈そんなことない〉って顔してるよ。何か、ちょっと焼けちゃうなぁー。　でも、そんな覇気のない感じで会ったら麻衣子、悲しむよ。きっと。　あとは、慶介君しだいだね」そう言ってベンチから沙織は立ち上がると、「じゃあ、私行くね」と言って公園をあとにした。

慶介は、「どうしていつもオレはこうなんだろー」と目を閉じて、息を「ハァー」と一つついたあと、「マイに会うまでに何か一個目標を決めよう」と気持ちを切り替えていた。
またしても、沙織に救われたような気分になった。

～目標～

慶介は沙織に会って以来、人が変わったように仕事の打ち込むようになった。
職場の周りもその変わりように驚いたが当の本人は気にする素振りもなく「月間の営業成績を1番になる」と目標を立てて今まで嫌々

行っていた飛び込み営業も積極的に行くようになった。
成績のいい先輩社員にいろいろ質問したり、本も読むようになった。
前は、一度断られると二度と行かなかったが、今は断られても断られても、真摯に説得するようになった。　「本当にいい広告にしましょう。　どんなことでも言って下さい」と相手のことも考えての提案もするようになっていった。
その甲斐あって、一件しか新規の広告契約を取れなかった昨年に比べると、序々に契約件数も増えていった。
そして、１２月期の新規の契約数で、成績トップの先輩、竹沢　元に2件差の2位になった。
慶介は、そのことについて特に喜びはまだなく「マイに会うまでに何としても1位になる！」という決心は変わっていなかった。

　年が変わってからの慶介は、「更に契約を」と考え、みんなが出向かない地区にも車を走らせ一件一件周って歩いた。　なかなか話しを聞いてくれないお店が多い中、粘り強く自分の会社の信念と自分の想いを伝えていった。　その営業スタイルが新たなお客様への紹介に繋がり、契約件数は益々増えていった。
その姿勢は先輩社員の気持ちまでも動かすようになっていた。　「前川には負けられないな」とみんなが口を揃えるようになった。
当然、会社全体の業績も良くなってきた。
そうして、ついに1月期の月間成績で慶介は一位になった。　「良かったな」「おめでとう」「今度は負けないからな」等、他の社員も自分のことのように喜んでくれた。　この時ばかりは慶介も素直に喜んだ。　もっと正確にいうと、「マイとの約束を守れて”ほっ”とした」というのが正直なところだった。
　慶介は、この頃麻衣子と一緒にパズルを大木の奥に隠しに行った時のことをよく思い出していた。
麻衣子が『お互い成長して会いたい』という言葉を自分の頭の中で何度も何度も巡らせながら。

そして、二人の運命の日まで一ヶ月を切っていた。

～運命の日　Ｔｗｏ　Ｐｉｅｃｅ～

翌月に入っても慶介は順調に契約を取っていた。　麻衣子との約束の日を、指折り数えながら。
ただ、その日が近づけば近づくほど同時に不安もよぎるようになっていた。

「マイは来てくれるだろうか？」　「記憶は戻ってるだろうか？」
「もし、来なかったらオレはどうなってしまうんだろう・・・・・・」
その不安を打ち消すかのように、仕事に益々打ち込むようになっていった。

そして、約束の日を迎えた。

麻衣子との約束の日、慶介は予め会社に頼んで有給をとっていた。
前日は、期待と不安が入り混じってなかなか寝つけず食事もそこそこにお昼前に出掛けた。

車で３０分もかからず、２人の秘密の場所の大木のある丘の下に着いた。
この場所を訪れるのは、麻衣子約束を交わした日以来だった。　その時は短く感じたこの道のりも今は、かかる時間は少しだが逆に長く感じられた。

車の中で、ジャケットの内ポケットの名詞入れにしまっていたあの”ピース”を確認して、丘を登り始めた。

（ここまで来たらマイを信じよう）

慶介は、心の中でそう呟きながらその場所を目指した。　ほどなくして大木の下に着いた慶介は、海を見下ろすように立っていた。麻衣子の姿はまだなかったが、（来るまで待とう！）と慶介は決めていた。

麻衣子を待っている間、改めて慶介は今までの事を振り返っていた。初めて麻衣子と会ったときの事、付き合ってからの楽かった事やケンカした事、この丘での事

そして、離れ離れになってからの事・・・・・・

そう思い返せば返すほど、「オレは今まで、マイに何をしてあげられたんだろう・・・」という思いが強くなっていた。

　そしてもし、麻衣子が来てくれたらどうしても伝えたいことが慶介にはあった。

　それから、４時間近く過ぎても麻衣子の姿は見えなかった。

まだ、４時前だったが冬の空は日が翳り始めていた。　雪は殆ど降らない所だが、さすがに寒さが身に沁みた。　それでも慶介は車に少し戻っては暖をとり、待ち続けた。

　更に、待ち続けたが麻衣子は一向に現れることはなかった。　時刻はすでに夜１１時を回っていた。

結局、その日の終わりの１２時まで待ったが麻衣子が来ることはなかった。

しかたなく家路に向けて車を走らせた慶介は、虚しさと寂しさの中

（やっぱりマイはまだ、記憶が戻ってないのだろうか・・・
記憶は戻っているけどもう、オレには会いたくないのだろうか・・・
・・）と自問自答するかのように思い巡らせた。

自宅に着いても寝付くことも出来ずに、ただただ寝室の天井を見て乾いた泪を流した・・・・・・・・

翌日、殆ど寝むれなかった重い身体のままいつものように慶介は会社に向かった。
朝、朝礼が終わると会社の車に乗り、営業に出掛けた。　昨日の今日なのでとても仕事をする気分ではなかった。
午前中、一軒だけ新規のお店を回っただけであとは何をするでもなく車の中にいた。
お昼におにぎりを一口だけ食べ、特に行く所も決めず、とりあえず車を走らせた。
２日間殆ど寝ていない状態の慶介は、眠気覚ましに何気に車のラジオかけた。

［ラジオの音］（サァーーー・・・　はい、というわけで次のおハガキ行きましょーか。　え～と続いては、ペンネーム、ゆいにゃんさん。　『トミーさん、いつも楽しく聞いています』
［トミー］ありがとうございます
『私、明日で２４歳になるんですが、一週間前、突然母から聞かされて・・・・・実は、本当の誕生日は今日らしいんです。　つまり、・・・・・２月２９日。　そうです、４年に一度の閏年に生まれたんです。　ちょっと、ビックリですよね！　何でも・・・・・・・・・・・・

と、ＤＪのトミーがそのハガキを読んでいる途中、慶介は『はぁっ！』とし、自分の携帯のカレンダーを見た。　（確か、８年前は・・・・・）
携帯で改めて今日の日にちを確認した慶介は、何かを思い出したかのように車を”あの丘”に向けて走り出した。

そうあの日。　２人で約束を交わした８年前のあの日。

実は、偶然にも麻衣子が決めた８年後が、今日と同じ２月の”２９日”だったのだ。

慶介は、最近の忙しさや時間の経過ですっかり約束の日を２月の最後、つまり普通の年の２８日だと思い込んでいたのだ。

普段は決してスピードを出さない慶介だが、この時ばかりはスピードを上げてあの丘を目指した。
（マイの几帳面な性格からして、絶対今日来るはずだ）と慶介は直感的に、そう確信していた。
一時間はゆうにかかるであろうその場所から、４０分ちょっとで昨日も来た丘の下に着いた。

車の中で一呼吸はいてから、丘をのぼり始めた。
そして、大木の下に着いたが麻衣子の姿はまだなかった。

慶介は、（必ず来る。　信じる。）

と自分に言聞かせて、丘の上に腰を下ろした。　この時慶介は、なぜか安心というかすごく落ち着いた気分になっていた。　そして、いつの間にか横になり眠ってしまった。　２日間寝ていないに等しかったのでムリもない・・・・・・・

どのくらい時間が経ったのであろう、閉じていた慶介の瞼に微かに影が懸かった。
微妙に反応した慶介が、ゆっくりと瞼を開いていった。

「ケイちゃん、やっぱり来てくれたんだ」

「ん～ん・・・・・・・・誰だ？・・・・
ん、マイ？・・・　　マイだよね！」

慶介は、一瞬ビックリしたがすぐにマイだと分かり身体を起こし立ち上がった。

高校の頃より髪は長くなっていたが、慶介の目の前にはまぎれもなく、麻衣子の姿があった。

「マイ、記憶は？　記憶は戻ったの」慶介の最初の問いかけに麻衣子は「実は、全部は未だに思い出せないんだけど、お父さんやお母さんのこと、沙織のこと、そしてケイちゃんのことは少しづつだけど思い出させるようになったの。ここで約束しとことも。　でもごめんね、あたしがケイちゃんに対してどんな風に想ってたのか、２人でどんな所に行ったとか、楽しかったことも含めてまだまだ思い

出せないことが沢山あるの。　ほんとにごめんなさい」と頭を下げた。
「ううん、そんなことは気にしてないよ。　だって、こうやって来てくれたじゃない。　少しだけでも思い出してくれて嬉しいよ」慶介は、これ以上ない笑い顔で答えた。
「あっ、これは何となく覚えてたから買ってきたよ」と麻衣子はミルクティーを袋から差し出した。
あの頃、２人が好きだった、今はペットボトルになったミルクティーを。
「捜すのにちょっと、手間取ちゃって来るの遅くなったんだけどね」と言って麻衣子も”ニコ”っとした。
「ありがとう。　これ懐かしいよね」といい、２人並んで座り一緒に飲み始めた。

「ところで、マイは今までどうしてて、今どこにいて、で何してるの？」と聞きたいことが山ほどある慶介は矢継ぎ早に聞いた。

すると麻衣子は飲んでいたミルクティーを地面に置くと、「どうして記憶を失くしたのかは今も思い出せないけど、そのあとは、記憶がない事へのあせりや恐怖があって誰とも会いたくなくて・・・それでケイちゃんからの手紙も受け取るのが辛くなったの。　あの時はごめんね。　あたしの為にしてくれたことなのに・・・で、当然学校にも行けなくて部屋でじっとしてばかりいたの」
［慶介］「そうなんだ・・・手紙のことは全然気にしてないから大丈夫だよ」
［麻衣子］「ありがとう。　そう言ってくれると安心する。　でね、そんな生活が４年続いて、ちょうどその時期にお母さん、倒れちゃって・・・・・
多分、あたしのことであたし以上に大変だったから、だからお母さんムリして・・・・・」と一瞬声に詰まったが続けて、「それで、

お母さん2ヶ月入院してて、その時あたしが看病しててそれで少しづつお母さんのことを思い出したの。　お父さんのことはそのずっと後だけどね」とちょっと笑顔に戻った。

［慶介］「そっかぁ～。　そしてその後どうしたの？」

「お母さんが退院した頃から、もう引きこもるのはやめようっと思って自分の部屋から出るようになったの。　記憶が戻らないことに怖がるより、立ち向かおうとして」

［慶介］「マイは強いなぁ～」

［麻衣子］「ううん、あたしが強いんじゃなくてお母さんやお父さん、そしてケイちゃんのお陰だよ。　ケイちゃんの手紙にはそのあと随分助けられた。本当に。　お母さん宛にも送ってくれてたんだってね。　去年初めて聞いて。　その手紙もその前のも、何度も見返して、こんなにもあたしのことを想ってくれているって思うだけで、頑張る気になれたんだから。　もちろん沙織にも励まされたし。　だからあたしはそんなに強くないよ。　みんなのお陰だよ。

実はね、去年の7月から日本に帰って来てたんだ。　アメリカで高校行きなおして卒業と同時にお父さんの東京の日本本社に転勤が決まって。　その時点ではまだケイちゃんのことをあまり思い出せずに連絡ができなくて。　そんな時に沙織から手紙が来たの。　あたし宛に。　なんか、沙織の会社のお客さんとあたしのお父さんが同じ会社とかで、その人からお父さん経由で、今の住所聞いたらしいんだけど」

慶介は（前に会った時に話してた人だな）と”ピン”ときた。

更に麻衣子は、「沙織とのことはその時ちょっと思い出していたから、メルアドを交換して何度か連絡とってたの。　そこで、いつも最後にケイちゃんの話しになって、『慶介君、今でも麻衣子のこと

待ってるよ』って、教えてくれたの。　そして、手帳に入れてあったパズルのピースを毎日見ているうちにケイちゃんのことを少しずつ思い出すようになったの。　さっきも言ったけど、どういうふうに過ごしたかは分からないけど、この丘のことと、何かを約束したことは思い出すようになったの。　それを確かめる意味もあって今日、ここへ来たの」と話し終えると、「あっ、ごめんね。　なんかあたしばっかり話して。　ケイちゃんは今どうしてるの？」今度は麻衣子が慶介に質問した。
慶介は、「オレはね、どうにか大学卒業して今は、地元の広告代理店で働いてる。　そういえば、先月ようやく月間の契約件数、一番になったんだ」

［麻衣子］「えぇー、すごいね！　頑張ってるんだ」
「うん、今はね。　その前はひどかったんだけど・・・・」と苦笑いをし「でも、マイと沙織ちゃんのお陰かな。　マイのことで随分沙織ちゃんには指導されたからね」といたずらっ子ように笑った。

「その笑い方は何となく覚えてるよ」と麻衣子も一緒に笑った。

「あたしは、来年から保育士さんの専門学校に行くことに決めたの。　英語はまだまだだけど、いろんな国の人が安心して預けられる保育園の保母さんになるのが、今のあたしの目標」

「うん、マイなら絶対出来るよ。　頼りないかも知れないけどオレが保障する！」と語尾を強めて慶介は言った。

「ありがとう。　なんかすっごい、頑張れそう！！」
麻衣子が答えた。

「そうだ、２人の約束を実行しようよ」と慶介は言いながら丘の上

の大木の隙間に手を入れた。

「あぁ～　あったあった」と言って8年前にしまっておいた2人で写した写真のジグソーパズルを取り出した。　若干、木屑や埃をかぶってはいたが、日焼けもしていないあの時のままのパズルであった。

「一緒に同時にお互いのピースをはめよう」慶介はそういいながら、上着の内ポケットからピースを取り出すと、麻衣子も持っていた手帳から同じくピースを出した。

慶介が木枠のケースから2人が写っているパズルを外すと、「じゃあ、いくよ。　せぇ～の～で」っと言って同時に2人で残りのピースをはめた。　そう、お互いの再会を約束して指きりをして撮った小指の部分の。

「この写真・・・・・

思い出したよ！ケイちゃん。　確か、あたしが頼んで作ってもらったんだよね」

そこには、眩しいくらいの二人の笑顔があった

「うん、そうだよ」と慶介。　そして続けて、

「またここでマイに会えたら伝えたいことがあって・・・・・

［麻衣子］　「えっ、」

慶介は、麻衣子の目をじっと見つめながら、

「前のことは覚えてなくてもいいから、改めて

相澤　麻衣子さん、

オレは今も、あなたのことが好きです

もう一度、最初から僕と付き合って下さい

お願いします」

あの時は言えなかった言葉を慶介は、今、真正面から麻衣子に伝えた

「・・・

はい、よろしくお願いします」

慶介は、麻衣子を強く抱きしめた・・・・・・

晴れ渡った雲一つない青い空　そして、

冬の太陽の光を浴びてキラキラ輝く海の水面

あの頃と何も変わらないまま

いつまでも、二人を包んでいた・・・・・

ー完ー

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1338t/

Two Pieceの純情

2011年6月2日10時55分発行